

आथूसः あーゆす

〈発行〉京都文教短期大学図書館／京都市宇治市槇島町千足80

ツヴァイクの『昨日の世界』

副館長・助教授 伊藤和男

オーストリアの作家、シュテファン・ツヴァイク(1881-1942)の『昨日の世界』(Die Welt von Gestern)は、第二次世界大戦のただ中、亡命生活をしながら、参考にするべき著書もなく、メモも手紙もない状況下で記憶のみにたより書かれた、ヨーロッパ、とりわけ故国オーストリアのウィーンを中心とする文化の崩壊を嘆く書である。

私の心に今だに残っている彼の言葉をあげてみよう。「つねに知らされ、引き込まれるということに対して、いかなる防禦も安全もなかった。人の逃れるべき国はなく、人のあがなうことのできる静けさはなかった。……つねに人は国家の要請に従わねばならず、最も愚劣な政治の餌食となり、最も空想的な変化に適應せねばならなかった。どんなに深く憤ってそれに反抗しても、つねに人は共通の問題につながれた。しかもそれはあらがい難く人を引きさらったのである。」当時の全体主義の嵐の中で、古き良き文化とそれをささえてきた社会が消え去って行く姿を目の当りにして、作家、芸術家として、個人の自由、人間の魂の自由をかけたがえのないものと考えるツヴァイクの憤り、嘆き、精神の叫びがうかがわれる。

「万人が自己の規範を持ち、自己の一定の尺度を持っていた。」と、安定と秩序の時代をなつかしむツヴァイクが愛し、心より享受することが出来たものが19世紀のウィーンを中心とする、とりわけ音楽、演劇に見られる天才的な文化であった。「文化とは、人生の粗野な素材からその最も巧緻なもの、最も繊細なもの、最も精緻なものを、芸

術と愛とによって機嫌をとりながら取りあげること以外の何を意味するであろうか。」と彼の文化論を展開する。ウィーンの人々が日常的に音楽、踊り、芝居、談笑を好んだと語り、「文化に対するこのような愛なくしては、この芸術という人生の最も神聖な余事を味わうと同時に吟味する感覚がなくなるとは、決して真のウィーン人とは言えなかった。」と誇らかな気持ちで当時を回想している。

彼にとっての古き良きヨーロッパが現実から過去のものになりつつある時代の流れの中で、「何か別なもの、新しい一時代が始まった。しかしその時代に至るためには、どんなに多くの地獄と劫火とをまだ踏み超えて行かねばならなかったことか。」と語っているが、未来に対する希望を抱きつつも、その困難に絶望する姿もうかがわれる。

『昨日の世界』は実に文化というものについて深く考えさせられる書であると同時に、この世における人間の幸福、内面の自由、国家と個人、時代と政治など、様々なテーマについて含蓄ある言葉の数々を発見することのできる書でもある。「この私の生命にとっては、つねに精神的な仕事をもっとも純粋な喜びであり、個人の自由が地上における最高の財産であった。」という惜別の言葉を残し、1942年2月22日に自らの生命に終止符を打ったのである。豊かなヨーロッパ文化の最後の果実を味わうことのできた教養人にして、洗練された文化の最後のにない手であったと言えよう。(引用は、みすず書房発行 ツヴァイク全集『昨日の世界』I、II 原田義人訳による)

『愛するということ』

教授 藤本正信 (教育心理学)

かつて小生が学生であった頃、Erich Fromm (1900-1980) の“The art of loving”※という本を読んだことがある。「愛すること」なんて誰もが経験する、ごく普通のことと考えていたが、フロムのこの本を読んで、少なからず驚かされたことを記憶している。

その本の中で、真実の愛の特徴を語っているが、その要点を簡単に紹介しようと思う。

まず第一に「愛すること」は与えることであるという。物質的に考えると「与える」ことができるためには、まず自分が与えることのできるものを所有していなければならないことになる。すなわち「裕福」でなければならないことになる。それでは「裕福」でない人は愛することが出来ないのであろうか？

この点についてフロムは次のように言っている。「たくさんもっている人が裕福なのではなくて、たくさん与えることができる人が裕福なのである。なにかを失うのではないかと心配し、思いわずらっている貯蓄型の性格の人は、どんなにたくさんのもをもっている、その人は貧乏人なのである。と言うよりも貧乏人になってしまった人なのである。」

したがって裕福であるかどうかということは、その人の所有の量にあるのではなく、精神的な豊かさにあることになる。みなさんは「貧者の一灯」という言葉を思い出さずでしょう。(知らない人は仏教の勉強をもっとして下さい。)

精神的に豊かであるということとは、それではどういうことを意味するのか？

フロムは「自分自身を、自分自身のもっている最も貴重なもの、自分の生命を与えるのである。……自分の喜び、自分の興味、自分の知識、ユーモア、ときには自分の悲しみをわかちあうのである。自分の中にあるすべてのものを表現し、相手

に与えるのである。」

こゝでもみなさんはおそらく「布施」という言葉を思い出されたことでしょうか。つまり「慈悲」のこゝろがその根底にあってはじめて人は人を愛することができるものであるということになる。

第二番目の特徴は「世話」(care)であるという。「花を愛しているという人が、花に水をやるのを怠って、枯らしてしまった場合、その人の花を愛しているという言葉は真実であるかどうか疑わしい。」

第三番目の特徴は「責任」(responsibility)である。この responsibility は able to respond あるいは ready to respond (いつでも対応できる) ということである。

第四番目は尊敬(respect)である。この語源はラテン語の respicere (ありのままに見る) ということで、自分の都合や、欲求を交えて見るのではなく、欠点は欠点として受け止め、その上でその人の個性の一部と見ることが、その人を“ありのままに見る”ことであり、その人を尊ぶことになるのである。

第五番目は「知識」(knowledge)である。何を尊び、何を尊んではならないかを判断するのは知識による。

子ども達に歌を歌ってやりたいと思っても、それを知らなければ歌ってきかせてやることはできない。面白い童話を話してやりたいと思っても、そのもちあわせがなければ与えることはできないのである。

以上、フロムの「愛」の特徴をごく簡単に紹介してみたが、みなさんはこれから社会に出てもいろいろな場面に会うことと思いますが、この真実の「愛」の特徴を胸に人生を力強く歩んで行かれることを心から望んでおります。

※『愛するということ』 エーリッヒ・フロム著

私のすすめる3冊

助教授 北川喜美子(声楽)

1 『がんばるの火』

梅村^{あつし}淳著；東銀座出版社

「こころは雨／人が死んだ／こころはさびしいです
こころのなかは雨です／こころの目から水がでた」

出産時より脳性マヒの重い障害をもつ彼は詩人である。「ことば」としての発声ができず、比較的自由に使える左手でワープロを使い自己表現をする。小・中学校と母子通学、現在の生活の場である「生活の家」でも母子通所が続く。ご家族の皆さまにエールを送りたい。不自由な体で格闘し、がんばっている生活のようすが、愛や感謝の気持が1文字1文字きざまれている。その叫びが伝わる素晴らしい詩集である。

2 『ニホン語日記』

井上ひさし著；文芸春秋社

私は、専門が声楽なので「ことば」には大変興味がある。若い人の使う言葉は勿論、業界のマニュアル語や新聞の見出し、特に前日に起った事件等がどのような活字になって次の日の新聞に載るかが楽しみなのだ。いろいろな角度から愛情をもって厳しく問題点を指摘している本である。中でもびっくりしたのは横浜の中華街での大学の盛り場研究会の「このどなたところが、あなたは気に入っていますか」というアンケート結果の1位が〈安くておいしい〉であったが、6位に〈この街に入ると、看板もなにかも漢字なので落ちつく〉という言葉があった。漢字は見ていて意味がわかり、落ちつくというのだ。今のカタカナ外来語の大氾濫に疑問を感じている人も多いのではないだろうか。

3 『リズムは心に響く』

エヴェリン・グレニー著；サイマル出版会

スコットランド北東部の農場で育った音楽好きの少女が12才で聴力を失うが、音楽部門のある学校に進学し、さらにロイヤル音楽アカデミーで学び、パーカッション奏者(打楽器)として数々の賞を得るに至る話である。ひたむきな情熱のもとでの練習の中から音の強弱や、柔らかさ、硬さ等を手の動かし方から学んでいく、そして全身で音をとらえるのである。本人の才能は勿論であるが、随所に「努力」「戦い」「練習また練習」という言葉を使用しているし、ハンディのために特別視されたり、自分の演奏に対する批評も純粋に論じてほしいという気持を示している。

人生や自分のやりたい事に迷いのある人はぜひ読んで下さい。

人々は自分の隠れ家を、田舎や海辺や山に求める。そして君もまた、常々そのようなものにとりわけ憧れをいだいている。けれども、それはみな哲学をする者にきわめてふさわしからぬことだ。というのは君はいつでも好きな時に、みずからの内に退くことができるのだから。実際、人は自己自身の魂以上に平穩で、わずらわしさのない隠れ家をどこにも見出すことはできないのだ。

マルクス・アウレリウス

『自省録』第四卷三節

『ギリシャ詩文抄』(平凡社)抜粋

※ マルクス・アウレリウス(二二一—一八〇)

は、ローマ皇帝(在位一六〇—一八〇)で五賢帝最後の著名なストア派哲学者。

『自省録(十二篇)』は、著者の思想と心情の赤裸々な表白であり、「哲学的日記」とか「古代精神の最高の倫理的所産」などと評され、ローマ帝政期のストア哲学の代表的文献の一つ。

『燃えよ剣』

生活科学専攻2回生 西川 瞳

現在新撰組はNHKで放送され話題となっています。そこで私は、多くの人に関心を持ってもらえると思い、司馬遼太郎の新撰組がテーマの著作『燃えよ剣』を紹介したいと思います。

新撰組と言えば、ほとんどの人が知り、口にす言葉は池田屋での事件です。中でも新撰組随一の剣豪と言われ恐れられた新撰組一番隊、隊長を務めた沖田総司の咯血は池田屋事件をさらに有名にしました。そして今なおその話は語り継がれ、私たちが知ることができたのだと思います。しかし、新撰組について知っていることはその程度で、新撰組が何のために結成され、どんな活躍してきたのか、この本を読むまでよく分かりませんでした。

この本の主人公となるのは新撰組副長を勤めた土方歳三です。石田村百姓喜六の末弟として生まれ、家は農家ながらも一郷では大尽と呼ばれるほどの家柄でした。けれども歳三は、家伝に伝わる打身・骨折に卓効ある秘薬、石田散薬の行商をしていました。不憫な生活をしいられているわけでもないのに、なぜわざわざそのような事を行っていたのか不思議に感じましたが、それにはきちんとした答えがあるのです。行商で武州はもちろん江戸・甲州・相州まで歩き、町々の道場に立ちよってはこの薬を進呈し、そのかわりに一手の教えを請うという剣術修行を年少の頃から行っていたようです。百姓の身分に生まれながらも武士という身分に憧れを抱き、少しでも武士に近づくことができれば、と剣術修行していたのかもしれませんが。そう考えると、今の子供たちが野球選手やサッカー選手に憧れて練習に励み、自分もその場で活躍できたらと夢を追いかけるのと同じで、かつて鬼副長と呼ばれた歳三にも可愛い所があったのだと思うとすこしおかしく思えました。けれどもこの年少の頃から行ってきた剣術修行により腕は確かで、新撰組局長を勤めた近藤勇や組一の剣豪一番隊隊

長の沖田総司とひけをとらなかったようですが、そのため困ったこともありました。歳三は近藤や沖田と同様天然理心流なのですが、その剣裁きは教えを請いたものと全く異なっていて、土方流と呼べるくらい自己流で結局資格は目録までしか習得できなかったみたいです。

次はやはり池田屋での事件が印象的でした。定刻になっても諸藩の援軍は来ず、わずかに数十人を二隊にわけ、倒幕派の集会場とされている所に赴くことになりました。実際行われていた場所は近藤隊が出向いた池田屋で、歳三が遅れて着いた頃には戦いの半ばは過ぎていたようです。近藤や沖田はバタバタと敵を切り捨て活躍していたのですが、私が驚いたのは歳三の行動です。遅れて着いたのだから、急いで参戦し自身の名を広げるため敵を切り伏せていくと思っていたのですが、実はそうではなかったのです。土間から一步も動かず、近藤が働きやすいようにし、この討ち入りで近藤の武名を挙げさせようとしていたのです。自分の武名よりも近藤の武名を上げることが新撰組に必要なことだと考えていたようです。しかも、戦闘の片づき始めた頃に会津や桑名に屋内に入られ横取りされないよう立ちはだかり、新撰組の名をここまで広げたのは歳三のお陰であったことを知りました。これ以外にもさまざまなことを知識の無い分、己のカンに頼り新撰組を大きくしていきます。自身のカンに頼り行動するだけでなく、その考えに自信を持てる所は今の私たちには考えられないことなのでしょうね。ある意味憧れ、尊敬します。

私もNHKのドラマにより読んでみようかなと購入したのですが、今ではテレビよりはまってしまい、この本は上下巻に分けられていたのですがあっという間に完読してしまいました。一度読むと区切りのいい所に辿り着くまで止められなくなりますので、就寝前に読むのは気をつけてください。私がそうでした。